

審査員が申請書を真剣に 読もうとする研究課題名とは？

前述したように、審査員は少なくとも研究題目は読んでくれる。審査員が申請書を真剣に読んでもらえるかどうかは、研究課題名次第である。申請書を書いてから課題名を考えるという手法もあるだろうが、筆者の場合にはまず、課題名をある程度決めてから申請書を書き始める。課題名は40字以内という制限がある。審査委員に興味をもってもらえる課題名とはどんな要素をもっていけばよいのだろうか。まず、採択されている特定領域研究や新学術領域研究から、工学系を例にとって新規性の研究課題名のキーワードを探してみる。その後、基盤研究や若手研究、挑戦的萌芽研究などの研究課題名について検討する。

1-1 大型研究課題名から新規性が感じられる キーワードを探してみる

各研究分野で聞き慣れた言葉の組み合わせでは新規性をなかなかアピールするのは難しいものである。まず、題目のキーワードとしてその研究分野で「新しい響き」を醸し出す専門用語 (terminology) について検討してみる。

特定領域研究や新学術領域研究はそれぞれの研究分野の実績のある研究者グループが提案するもので、審査委員会は他分野の審査委員から構成されるため、採択に至っている研究課題に工夫がこらされ、新規性がアピールされている。どのように専門用語が選択され、題目に工夫がこらされているか、採択されている特定領域研究や新学術領域研究から検討してみよう。

事例1：特定領域研究から

①「サブナノ物質中におけるプロチウム新機能」

著者が「水素」特定領域研究に応募した時期には、水素関連の研究プロジェクトが経済産業省を初め、盛んに実施されており、「水素」という語句を使用しての申請はなかなか採択に至らなかった。例えば、「材料中における水素新機能」は新規性をアピールするには響きが弱いであろう。ある時、「水素」という語句を使用しないとしたらどんな語句があるか、拡散を専門にしている先輩に伺ったら、「プロチウム」というと語句はどうだろうというアドバイスを頂いた。「**プロチウム (protium)**」は **質量数1の水素のことで軽水素ともいう**。重水素 (deuterium) や3重水素 (tritium) の水素同位体を区別するための名称でもある。**プロトン (H⁺) の語源でもある**。プロトンという名称は聞いたことがあっても、その語源については意外と知られていない。また、「材料」という名称も新しい響きはない。水素だけが材料中に吸収され、また放出される特性があり、「材料」を格子という概念でとらえ、鉄などの格子はサブナノサイズであることから、「**材料**」を「**サブナノ格子物質**」と読み替えることにした。従って、「**材料中における水素新機能**」は「**サブナノ物質中におけるプロチウム新機能**」という題目となった。特定領域研究として採択に至った。

②「ボルテックス・エレクトロニクス」

超伝導エレクトロニクスは超伝導研究が盛んに実施される中で、新規性をアピールするのはなかなか難しい状況であった。阪大の小林猛教授は、**超伝導体の量子磁束(ボルテックス)を信号として扱うということに着目した**。この提案プロジェクトでは、ボルテックスの実態を知ること、ボルテックスの基本動作を知ること、ボルテックスをどこまで制御できるのかを明らかにすること、生体量子磁気計測技術の向上など、超伝導体の新しいエレクトロニクスの構築を目指すことを掲げ、特定領域研究として採択に至っている。